

唐の四大家考

藤 森 大 雅

はじめに

歐陽詢（五五七―六四一）、虞世南（五五八―六三八）、褚遂良（五九六―六五八）は中国の唐代を代表する書人であり、それぞれの個性を発揮した楷書の表現様式を確立した。後世に与えた影響は非常に大きく、書を学ぶ上で欠かせない存在である。日本では古来より彼らを「初唐の三大家」や、盛唐の顔真卿（七〇九―七八五）を加えて「唐の四大家」と総称し、彼らの残した名蹟は書の古典として現在も親しまれている。

書人がある枠組みから並称または総称する例はその他にも多数存在する。例えば「四賢」「二王」「宋の三（四）大

家」の他、日本にも「三筆」「三跡」などの呼称が確認できる。ちなみに「四賢」は南朝梁の袁昂『古今書評』に「張芝驚奇、鍾繇特絶、逸少鼎能、献之冠世、四賢共類、洪芳不滅。」（張芝は驚奇、鍾繇は特絶、逸少は鼎能、献之は世に冠たり。四賢類を共にし、洪芳滅ぜず。）とあり、「二王」は南朝宋、虞龢『論書表』に「厥後群能間出、泊乎漢魏、鍾張擅美、晋末二王称英。」（厥の後群能間出し、漢魏に泊んで、鍾、張美を擅にし、晋末二王英と称す。）とある。いずれも一定の評価が認められた書人が、特定の時代や書の系譜といった共通する条件によって並称、総称されるようになり、後世に影響を与えたと考えられる。「初唐の三大家」や「唐の四大家」も同様であるが、いつ、どのような経緯で総称されるようになったかは定かではな

い。これを検討することは中国書道史における「唐の四大家」の存在意義や歴史的な評価の変遷を再認識することになると思われる。

よって、本稿では中国で著された歴代の書にまつわる言説である書論を中心に「唐の四大家」の名称が定着する時期とその過程を考察する。

第一節 「唐の四大家」名称の始まり

はじめに、「唐の四大家」の説明を『書法用語辞典』⁽³⁾で確認してみたい。

唐朝は一般に初唐・盛唐・中唐・晩唐の四期に分けられる。その初唐に輩出した著名な書法家四人を指す。すなわち、欧陽詢・虞世南・褚遂良・薛稷。彼らは二王（王羲之・王献之）の書体の継承者である。欧陽詢は「筆力險勁、結構方整」、虞世南は「円潤秀美、柔中含剛」、褚遂良と薛稷の字跡は「秀丽飛舞、婀娜多姿」と評されるが、四家それぞれ特色を具え、多く世人の効仿するところである。ちなみに唐の四大家と

は、欧陽詢・虞世南・褚遂良に中唐の顔真卿をいう。

項目に「唐の四大家」を掲げる辞書の中で最も詳細に説明されている辞典であるが、「唐の四大家」の由来は明記されていない。これは日本のみならず、中国で出版されている書道辞典もほぼ同じ状況であり、項目に「初唐四家」を立てるものは僅かに『中国書論辞典』（陶明君編著、湖南美術出版社、二〇〇一年一〇月）一冊が確認できたのみで、「唐の四大家」および「初唐の三大家」は掲載されていない。日本で一般的に使用される欧・虞・褚による三大家の総称は中国では通行しておらず、日中で異なっている。

この点について魚住和晃氏は次のように述べている。⁽⁴⁾

日本では通常、欧陽詢、虞世南に褚遂良を加えて初唐の三大家といい、さらにこれに盛唐の顔真卿を加えて唐の四大家としている。ただし、これは日本人による勝手な割り切りかたで、それでは孫過庭や張旭、また懷素や李邕は大家ではなかったのか。ちなみに欧陽詢、褚遂良、顔真卿には自書として信頼するにたる碑

文が複数にわたって残るが、虞世南においては「孔子廟堂碑」がただ一つ伝承されるのみで、他に確証のある書跡はない。一方、孫過庭、張旭、懷素は草書によって名が知られ、李邕は碑文においても行書を書いた。このことから、ここでいう大家とは、楷書において自己の作風を確立したことを意味していることがわかる。中国では歐陽詢、虞世南を欧虞二家として並べ、これに褚遂良、薛稷を加えて、初唐の四大家とすることが普通である。

日本では「初唐」、「唐」の時代設定と「三大家」、「四大家」の人数が異なる表現が存在し、これが日本人による勝手な割り切りかたであるという。また、中国では薛稷を加えた「初唐の四大家」が一般的であると日中の違いにふれ、大家の人選の条件には楷書において自身の作風を確立したことを指摘している。

しかし、中国にも人選が異なる四大家の例が確認できる。『莆陽居士蔡公文集』⁽⁵⁾には次のように記されている。

唐初二王筆迹猶多、當時學者莫不依倣。今所存者無

幾。然觀歐虞褚陸号为名書、其結約字法皆出王家父子。学大令者多放縱、而羲之投筆処皆有神妙。

（唐初は二王の筆迹猶ほ多く、當時の學者依倣せざるはなし。今存するところは幾ばくも無し。然れども欧・虞・褚・陸の号して名書と為すを觀るに、其の結約の字法は皆王家父子に出づ。大令を学ぶ者は多くは放縱にして、羲之の投筆の処は皆神妙有り。）

欧・虞・褚に陸柬之を並称して、名書と呼ばれるものは王羲之、献之から出ているという。虞世南の甥にあたる陸柬之は現代日本の書道史観から見れば、唐代の書人として周知されている程度で、欧・虞・褚と肩を並べるほど書名は高くないであろう。こうしてみると、日中における「唐の四大家」観の相違は特に人選に表れており、そこには両国の書道史観が反映されているようである。

では、「唐の四大家」の名称の始まりについて確認しておこう。管見の及ぶ限りでは、「四家」の総称が確認できるのは明代の『春雨雜述』⁽⁶⁾であり、そこには以下のような記述がある。

智永伝唐虞永興世南伯施。伯施伝欧陽率更詢、信本伝褚河南遂良登善。登善伝薛少保稷嗣通、是為貞觀四家。

(智永、唐虞永興世南伯施に伝へ、伯施、欧陽率更詢に伝へ、信本、褚河南遂良登善に伝へ、登善、薛少保稷嗣通に伝ふ。是れ貞觀四家と為す。)

隋の智永から虞世南、欧陽詢、褚遂良、薛稷へと書法が伝えられた。これを「貞觀四家」とするとある。貞觀は太宗が在位した貞觀年間の初唐であるため、初出とみて大過無いであろう。

ここに記される書法の伝承について違和感があるのは、虞世南が欧陽詢に書法を伝えたとする内容である。虞世南にとつて一歳年長者である欧陽詢に書法の伝授が行われたというのは考えにくく、欧陽詢が虞世南から書法を伝えられたという記述は管見の範囲では見られない。総称するために必要な共通する条件として王羲之書法とその系譜を強調するための表現であったと捉えておきたい。

次いで、清代の何紹基の書論にも欧・虞・褚・薛の書法の特徴を比較して「唐初四家」と称する記述が確認でき

る。

唐初四家、永興專祖山陰、褚薛純乎北派、欧陽信本從分書入手、以北派而兼南派、乃一代之右軍也。

(唐初の四家、永興は専ら山陰を祖とし、褚、薛は北派に純らなり。欧陽信本は分書より入手し、北派を以て南派を兼ね、乃ち一代の右軍なり。)

永興(虞世南)は山陰(王羲之)を根源とし、褚・薛は北派に專一し、欧は分書(隸書)から入って北派と南派を兼ねて一代の右軍(王羲之)と高く評価する。注目は四家の書派、つまり書法の違いを指摘している点である。これは先述の二王を共通項として括る『春雨雜述』の言説が定着し、「唐の四大家」の概念がすでに形成されているからこそ、南派と北派という別の切り口による「四大家」の考察が成り立つのではなからうか。

『春雨雜述』の著者、解縉の生卒年は明代の洪武二年から永樂十三年(一三六九—一四一五)であり、『東洲草堂文鈔』の著者、何紹基は清代の嘉慶四年から同治十二年(一七九九—一八七三)である。約四五〇年の間でその他

の書論⁽⁸⁾における記述がそれほど多くないのは当時の書の流行とも関係があるろうが、日中で「唐の四大家」の位置付け方に隔たりがあるように感じられる。中国で出版されている書道辞典での掲載数が僅かであったことが示すように、特に日本において重要な用語となった可能性が想像できる。日本における展開についても検討の余地があるだろう。

先述のとおり、書論における「唐の四大家」の概念は明代から清代にかけて徐々に形成されることが想定できた。続いて「唐の四大家」が定着する以前の記述を中心に検討し、「唐の四大家」の概念が形成される過程を整理してみたい。

第二節 唐代の書品論

欧・虞・褚の書に言及した早期の書論は李嗣真の『書後品』といえるだろう。『書後品』は六朝の九品中正法に由来する書品論を展開し、古代から初唐まで八二名の書人を上・中・下をさらに三段階に分け、最上位に「逸品」を置く10段階評価を採用する。その中で三番目に当たる「上下

品」に欧・虞・褚を、五番目に相当する「中上品」に陸柬之を位置付ける一方で、薛稷の名は見られない。

続く、張懷瓘の『書斷』は六朝時代の伝統的な流れを汲んだ書論で、三者を比較した書の優劣についての記述が具体的になる。欧陽詢の条では、虞世南を引き合いに出して以下のように述べられている。

八体尽能。筆力勁險：真行之書、雖於大令、亦別成一体。森森焉若武庫矛戟。風神嚴於智永、潤色寡於虞世南。：自羊薄以後、略無勍敵。

（八体尽く能くす。筆力勁險。：真・行の書、大令よりすと雖も、亦た別に一体を成す。森森として武庫の矛戟の若し。風神は智永より厳しく、潤色は虞世南より寡なし。：羊・薄自り以後、略ば勍敵無し。）

欧陽詢は八体を全て善くし、筆力は強い。楷書と行書は大令（王獻之）から学んで新しい一面を開いた。それは武器庫に並んだ矛戟のようで、風神は智永よりも厳しく、潤色は虞世南よりも少ないと評している。続けて、羊欣、薄紹之以後、欧陽詢に勝るものはいないが、ただ永公（虞世

南)のみ匹敵すると、その力が拮抗関係にあることが述べられている。

虞世南の条でもやはり欧陽詢と比較して次のように記している。

其書得大令之宏規、含五方之正色。姿榮秀出、智勇在焉。：然欧之与虞、可謂智均力敵。：論其衆体、則虞所不逮。：虞則内含剛柔、欧則外露筋骨、君子藏器、以虞為優。

(其の書は大令の宏規を得、五方の正色を含む。姿榮秀出、智勇焉に在り。：然れども欧と虞と、智均しく力敵すと謂ふ可し。：其の衆体を論ずれば、則ち虞の逮ばざる所。：虞は則ち内に剛柔を含み、欧は則ち外に筋骨を露す。君子は器を藏す、虞を以て優れりと為す。)

虞世南の書はすぐれた規範を得て、純粋な正当な書法を内に持っている」と評している。さらに欧陽詢と虞世南は才智、力量ともに互角であるが、多くの書体にわたって論じると、虞世南は欧陽詢に及ばないところがある。虞世南の

書は内に剛と柔をあわせもち、欧陽詢の書は外に筋骨をあらわしている。いわゆる君子は器を藏す、という見方からすれば、虞世南の方がまさっていると両者の書の特徴を対比して明らかにしている。

欧陽詢と虞世南は実力伯仲であるが、各書体を幅広く書くことができる専門性では欧陽詢が勝り、剛柔のバランスがよく、強さを内に蓄えて外に表さないという道德的な面で虞世南が優れていると述べている。

一方の褚遂良については、

少則服膺虞監、長則祖述右軍。真書甚得其媚趣、若瑤台青瑣、窈映春林、美人嬋娟、似不任乎羅綺、增華綽約、欧虞謝之。其行草之間、即居二公之後。

(少きときは則ち虞監を服膺し、長じては則ち右軍を祖述す。真書甚だ其の媚趣を得たり。瑤台の青瑣、春林に窈映し、美人嬋娟として、羅綺に任えざるが若し。増華綽約なるは、欧・虞も之を謝す。其の行草の間は、即ち二公の後に居る。)

と述べ、若い時は虞監(虞世南)の書法を大切に守り、成

長してからは右軍（王羲之）の書法にならった。楷書は王羲之の媚趣を得て、あたかも玉で飾った御殿の門の青い扉のくさりか、春の林に美しく照り映えているようで、美人の身のこなしがあでやかで、うすものの衣服にも耐えられないようだといひ、華やかさを増し、たおやかなさまは歐陽詢、虞世南も及ばないが、行草書では、二人に劣ると評している。

書体の比較では優劣が指摘されるものの、総合的な評価の視点は多角的であり、書表現の多様性を認め、かつ高い鑑賞眼を持つ張懷瓘の批評は信頼を置くことができるといえよう。

ここで注目したいのは、書体や評価の観点によつて優劣はあるものの、書の特徴を言語化し、いづれも同じ「妙品」に位置付けて評価した点である。伝統を踏まえた書の評価基準が明確に示され、品第という形式に則つて公に示されたことに大きな意味がある。書論そのものの発展と張懷瓘の慧眼が後世の「四大家」へと繋がる礎を築いたと考えられる。

『書断』で唐代の書人中、最上位に位置付けられたのは上述の三者に陸柬之を加えた四名である。続いて薛稷と入

れ替えて「唐の四大家」に加えられる陸柬之に対する評価を確認する。

『書断』では、楷書と行書が欧・虞・褚と同じ「妙品」に、草書と章草は「能品」に位置付けられ、その特徴について以下のように評されている。⁽¹³⁾

而晚習二王、尤尚其古。中年之迹、猶有怯懦、総章已後、乃備筋骨。殊矜質朴、恥夫綺麗。…尤善運筆。或至興會、則窮理極趣矣。…一覽未窮、沈研始精。然工於效倣、劣於独断。以此為少也。

（而して晚には二王を習ひ、尤も其の古を尚ぶ。中年の迹は、猶ほ怯懦有るも、総章已後は、乃ち筋骨備う。殊に質朴を矜り、夫の綺麗を恥ず。…尤も運筆を善くす。或いは興會するに至れば、則ち理を窮め趣を極む。…一覽して未だ窮めざるも、沈研すれば始めて精なり。然れども效倣に工みにして、独断に劣る。此を以て少けりと為す。）

陸柬之をはじめ虞世南に学び、後に二王を学んで古雅な趣を尊重した。中年期の筆跡にはひ弱さがあるが、総章

(六六八―六七〇) 以後には筋骨が備わり、とくに質朴さを自負して、綺麗で華やかな美しさを恥とした。しかし、模倣には巧みであるが創作には劣っており、これによって物足りないといふ評価されている。

続いて、薛稷に言及する書論を確認する。『書断』は楷书と行書を「能品」に、それに次いで草書も書けたと評している。⁽¹⁴⁾

書学褚公。尤尚綺麗、媚好膚肉得師之半。可謂河南公之高足。甚為時所珍尚。

(書は褚公に学ぶ。尤も綺麗を尚び、媚好膚肉は師の半ばを得たり。河南公の高足と謂ふ可し。甚だ時の珍尚する所と為る。)

薛は褚遂良を学び、綺麗を尚んで媚好膚肉は褚遂良の半ばを得た。褚遂良の高弟といふことができる。当時は大いに珍重されたという。

張懷瓘の陸柬之と薛稷の評価を比較すると実に対照的である。張懷瓘は「従心者為上、従眼者為下。先其草創立体、後其因循著名」(心に従ふ者は上と為し、眼に従ふ者

は下と為す。其の草創にして体を立つを先とし、其の因循にして名を著はすを後とす)⁽¹⁵⁾と自らの評価の観点を明確に示している。これに照らせば陸柬之を薛稷よりも上位とする評価は理解できる。さらに、陸柬之は「為時所鄙」(時の鄙しむ所と為す)、薛稷は「甚為時所珍尚」(甚だ時の珍尚する所と為る)と、当時の世間での評価とは相反していたことが理解できる。

また、陸柬之は創作に劣り、薛稷は褚遂良の半ばを得たとの指摘から、それぞれに個性を発揮した欧・虞・褚と並称するのは些か違和感を覚える。⁽¹⁶⁾実際の書作品を見ても、陸柬之は「文賦」および伝陸柬之の「五言蘭亭詩」が知られるがいずれも墨跡の行草書であり、「頭陀寺碑」があったとされるが今は伝わっていない。欧・虞・褚がみな勅令による楷书碑を書丹しているのに対し、陸にはそれと同等の作品が確認できないとなれば、やはり並称するには物足りないと言わざるを得ない。欧・虞・褚の三家でも十分であり、ここに一人追加するに相応しい人物を挙げる方が難しい。むしろ「四」という数字に重きがあり、陸か薛は後付けのようにさえ感じられる。魚住氏が「勝手な割り切り方」と指摘した日本の「初唐の三大家」の方が中国の書論

で論じられた評価の実態を捉えた表現であるように思われる。

第三節 右軍の一体を得たり

同じ唐代の書論の『論書』⁽¹⁷⁾は歴代の書人と欧・虞と褚・薛をそれぞれ並称し、比較して次のように述べている。

鍾善真書、張称草聖。右軍行法、小令破体、皆一時之妙。近古蕭永欧虞、頗伝筆勢、褚薛已降、自鄧不譏矣。然人謂虞得其筋、褚得其肉、欧得其骨、当矣。夫鷹隼乏彩、而翰飛戾天、骨勁而氣猛也。輩翟備色、而翱翔百步。肉豊而力沈。若藻曜而高翔、書之鳳凰矣。欧虞為鷹隼、褚薛為輩翟焉。

(鍾は真書を善くし、張は草聖と称せらる。右軍の行法、小令の破体、皆一時の妙なり。近古、蕭・永・欧・虞、頗る筆勢を伝へ、褚・薛已降、鄧自り譏らず。然れども人「虞は其の筋を得、褚は其の肉を得、欧は其の骨を得」と謂ふは、当れり。夫の鷹隼彩乏しくも、翰く飛びて天に戻る。骨、勁くして、氣、猛な

ればなり。輩翟は色を備うるも、翱翔すること百歩のみ。肉、豊かにして、力、沈めばなり。藻曜にして高く翔ぶが若きは、書の鳳凰なり。欧虞は鷹隼為り、褚薛は輩翟為り。)

「筋」「骨」「肉」はすでに六朝時代の書論に登場する審美基準である。「筋」「骨」の備わる欧陽詢と虞世南を高く評価する一方で、「肉」を得た褚遂良およびその系譜に連なる薛稷を一段低く見ており、同列に評価していない点は前述した張懷瓘の書論とは異なる視点として注目し値する。徐浩はまた、「初学之際、宜先筋骨。筋骨不立、肉何所附。(初学の際、宜しく筋骨を先にすべし。筋骨立たずんば、肉何所れのところにか附かん。)」と述べているように、⁽¹⁸⁾学書の本質に筋骨を位置付けているが、欧・虞よりも細みですっきりとした線の印象が強い褚・薛に「肉」と評している点は興味深い。

この書論の内容を踏まえたと思しき記述が南唐、李煜の名で残されている⁽¹⁹⁾。

李後主云、後世書家可得右軍之一体。虞世南得其美

韻、而失其俊邁、歐陽詢得其力而失其溫秀、褚遂良得其意而失其變化。薛稷得其清、而失于窘拘、顏真卿得其筋而失于粗魯、柳公權得其骨、而失于生獷、徐浩得其肉、而于俗、李邕得其氣、而失于体格、張旭得其法、而失于狂、獨猷之俱得、而失于驚急、无蘊藉態度。

(李後主云ふ、「後世の書家は右軍の一体を得べし。虞世南は其の美韻を得るも、其の俊邁を失ふ。歐陽詢は其の力を得るも、其の溫秀を失ふ。褚遂良は其の意を得るも、其の變化を失ふ。薛稷は其の清を得るも、窘拘に失せり。顏真卿は其の筋を得るも粗魯に失せり。柳公權は其の骨を得るも、生獷に失せり。徐浩は其の肉を得るも、俗に失せり。李邕は其の氣を得るも、体格に失せり、張旭は其の法を得るも、狂に失せり。獨猷之は俱に得るも、驚急に失せり。蘊藉の態度無し」と。)

書を善くするものはそれぞれ右軍(王羲之)の一体を得ると述べ、欧・虞・褚・薛・顏・柳・徐・李・張といった唐代を代表する書人を取りあげ、各家が王羲之の一部を得て

一部を失う、といった表現で比較し、最後に王猷之の名を挙げているように書人は時代順に列挙されていない。ここでは、虞世南は美韻を得ているが俊邁さを失い、歐陽詢は力強さを得たが溫秀さを失い、褚遂良は意を得たが變化を失い、薛稷は清を得たが窘拘を失い、顏真卿は筋を得たが粗魯を失ったと評している。典型である王羲之を前に唐代の書人は並列の關係にあり、また王羲之を基準として簡にして要を得た表現である。

この「右軍の一体を得たり」の観点はその後の書論にも踏襲されている。明代の何良俊は次のように記している。⁽²¹⁾

唐人書、欧率更得右軍之骨、虞永興得其膚沢、褚河南得其筋、李北海得其肉、顏魯公得其力、此即所謂皆有聖人之一体者也。其後徐季海則宗褚河南、張從申則宗李北海、柳公權則規模顏魯公、而去晋法漸遠矣。

(唐人書、欧率更は右軍の骨を得、虞永興は其の膚沢を得、褚河南は其の筋を得、李北海は其の肉を得、顏魯公は其の力を得、此れ即ち所謂「皆な聖人の一体有る」者なり。其の後徐季海は則ち褚河南を宗にし、張從申は則ち李北海を宗にし、柳公權は則ち顏魯公を

規模にして、晋法を去ること漸く遠し。

何良俊は欧・虞・褚・李・顔を「聖人の一体有り」と評価する。欧・虞・褚に李北海（李邕）を加えて並称し、反対に徐季海（徐浩）は褚河南（褚遂良）を、張從申は李北海を、柳公権は顔魯公（顔真卿）をそれぞれ宗としたことで晋法、すなわち王羲之の伝統が次第に失われたと指摘している。何良俊の「聖人の一体有り」の聖人は当然右軍（王羲之）であるから、李煜の「右軍の一体を得たり」と同義である。

清代の楊賓は先掲の李煜の書論を引き、その内容を受けて次のように述べている。²²⁾

李後主云、…余謂此評誠有根拠、但欧甚秀、褚變化、而張亦可商。因改其語曰、欧得其力、而失其變化。褚得其巧、而失其拙。張得其變化、而失其收斂。未知有識者、又以予言為何如也。

（李後主云ふ、…余謂へらく、此の評誠に根拠有るも、但だ欧は甚だ秀いで、褚は變化するも張も亦た商^{はか}るべし。因りて其の語を改めて曰く、「欧は其の力を得る

も其の變化を失ふ。褚は其の巧を得るも其の拙を失ふ。張は其の變化を得るも其の收斂を失ふ」と。未だ有識なる者を知らず、又た以て予の言を何如と為すや。）

李後主（李煜）の言説を引き、自らの言葉に改めて欧・褚・張に対する見解を述べている。

これらはいずれも唐代における王羲之を典型とした伝統的な書法の継承の検証をする内容である。唐代を代表する書人を取り上げ、王羲之との比較を通じてそれぞれの書法の特徴が整理されている。その特徴を表現する言葉は多少異なるが、概ね的を射た指摘であろう。この並称の共通項は唐代における王羲之の系譜に連なる書人であるため、欧・虞・褚以外の書人名も多く登場するものの、薛・陸の名が無い点は注目に値する。その理由は、何良俊が柳公権は顔真卿を、徐季海が褚遂良を宗として晋法（王羲之の書法）を去ったとするのと同じと推察できる。この「右軍の一体を得」の説は否定的な内容も含むため、欧・虞・褚にとって好ましい面ばかりではないが、〃唐代〃という時代と、〃王羲之〃という書法の關鍵詞によって並称される習

慣によって三者の結びつきはより一層強化され、他とは一線を画した総称へと向かう大きな役割を果たしたと思われる。

第四節 顔真卿

第一節で触れたように、日中の「唐の四大家」に対する人選や時代範囲はやや異なる。日本では「四大家」といえば欧・虞・褚・顔で唐代を代表する書人とするのに対し、顔真卿を含めない中国では初唐に限定して薛稷、陸東之のいずれかを加えている。この違いは時代範囲よりも人選の意味がある。つまり顔真卿をどう捉えるかである。

顔真卿は書道史上における重要人物であることに間違いないが、在世当時の書名はそれほど高くなく、その後も酷評する言説が確認できる。以下にその一部を列挙してみよう。

・北宋、米芾『宝晋英光集』⁽²³⁾

大抵顔柳挑踢、為後世醜怪惡札之祖、從此古法蕩無遺矣。

（大抵顔、柳の挑踢は、後世の醜怪惡札の祖為り、此れより古法蕩として遺なし。）

・明、楊慎『墨池瑣錄』卷二⁽²⁴⁾

書法之壞自顏真卿始。自顏而下、終晚唐無晉韻矣。

（書法の壞、顔真卿自り始まる。顔自り下りて、終に晚唐に晋韻無し。）

米芾は顔真卿の楷書を酷評するが、行草書は高く評価していることから顔真卿そのものを否定してはいない。楊慎は唐代の書の衰退が顔真卿から始まり、晩唐には晋代の書の風格が無くなってしまったと述べている。

しかし、それ以上に顔真卿の書を評価する言説は多く見られる。顔真卿の書の評価が一変するのは北宋に入ってからである。「宋の四大家」の一人である蘇軾は次のように述べている。⁽²⁵⁾

顔魯公書、雄秀獨出、一變古法、如杜子美詩、格力天縱、奄有漢魏晉宋以來風流。後作者、殆難復措手。

（顔魯公の書は、雄秀獨出して、古法を一變すること、

杜子美の詩の如く、格力天縱にして、漢魏晋宋以来の風流を奄有せり。後の作者は、殆ど復た手を措き難し。）

顔真卿を「古法を一変」「漢魏晋宋以来の風流を奄有せり」と高く評価する。同じく「宋の四大家」の黄庭堅は以下のように述べている。⁽²⁶⁾

觀魯公此帖奇偉秀拔、奄有魏晉隋唐以來風流氣骨、回視歐虞褚薛、皆為法度所窘、豈如魯公然出於繩墨之外、而卒与之合哉。蓋自二王後、能臻書法之極者、惟張長史与魯公二人。

（魯公の此の帖を觀るに、奇偉秀拔にして、魏晉隋唐以來の風流氣骨を奄有せり。欧、虞、褚、薛、徐、沈の輩を回視するに、皆な法度の窘する所と為る。豈に魯公の蕭然として繩墨の外に出でて、卒に之と合するが如くならん哉。蓋し二王自り後、能く書法の極に臻る者、惟だ張長史と魯公との二人のみ。）

顔真卿を「魏晉隋唐以來の風流氣骨を奄有せり」と評する

のに對し、欧・虞・褚・薛は「皆な法度の窘する所と為る」といい、さらに顔真卿、張旭を二王と同じく「書法の極に臻る」と絶賛する。

⁽²⁷⁾明代には董其昌が顔真卿の書を評して次のように述べている。

争坐位帖、宋蘇黃米蔡四家書、皆仿之。唐時欧虞褚薛諸家、雖刻二王、不無拘于法度。惟魯公天真爛漫、姿態橫出、深得右軍靈和之致。故為宋一代書家淵源。

（唐時の欧、虞、褚、薛諸家は、二王を刻画すと雖も、法度に拘わること無きにあらず。惟だ魯公のみ天真爛漫にして、姿態横出し、深く右軍の靈和の致を得たり。故に宋一代の書家の淵源と為す。）

欧・虞・褚・薛は、二王の筆画の跡をなぞっているが、法度に拘ることなしとしない。ただ魯公だけは天真爛漫で姿態は横出し、深く右軍の靈和の趣を得ている。それ故に宋一代の書家の淵源となっていると高く評価する。

蘇軾、黄庭堅、董其昌らの書作品にも顔真卿の影響は顕著であり、彼らが顔真卿を支持していたことは、実作から

も裏付けることができる。

「右軍の一体を得たり」で確認したように、王羲之を典型とする立場の書論からすれば、たとえ顔真卿と雖も王羲之の前では欧・虞・褚らと等しく一体を得たものである。一方、北宋の蘇軾、黃庭堅、明代の董其昌からすれば、古代から晋宋の書の風流を備えている点や、唐代の書の時代的特徴である法度に縛られることのない天真爛漫さといった点を顔真卿に見い出して評価した。後者の立場では、自ずと顔真卿を欧・虞・褚らと同列に扱うことはできない。董其昌が「宋一代の書家の淵源」というように後世に与えた影響は欧・虞・褚より大きく、むしろその存在は王羲之と比肩しうるところにあるといえよう。そうなれば「唐の四大家」の枠組みには到底収まらない存在となる。そのような中国書道史の大局から判断した場合、顔真卿が四大家に含まれないのは当然と言ってもよいだろう。これに対して日本では「時代」「楷書」「王羲之」という共通項から、顔真卿を積極的に「唐の四大家」にとり入れた。「唐の四大家」の顔真卿の位置付けをめぐるのは、大局的な中国と局所的な日本という、日中の書法史観の相違が影響していると思われる。

終わりに

本稿で明らかになった内容は以下の通りである。

- ① 唐代の書品論（特に張懷瓘）による評価が三（四）家の書法の特徴と評価を言語化して公に示したことで並称される礎を築いたと思われること。
- ② 王羲之という共通項で並称する「右軍の一体を得たり」の説が、その後の総称への道をより強固なものとしたこと。
- ③ 書論の記述から「唐の四大家」の総称は明代初期から清代後期の約四五〇年間に広まっていたと思われること。
- ④ 「四大家」に顔真卿を含めない中国と含める日本の相違は日中の書道史観が影響していること。

本稿で考察した「唐の四大家」の名称の成立過程は、個人を単独で評価・評論する言説（唐代の書品論）に始まり、共通する特徴を備える書人が並称（「右軍の一体を得」

の説)され、最終的に共通する特徴を冠して総称する(明代初期～清代後期)ことによって定着してゆくと考えられる。しかし、この期間の書論の記述自体は思いの外少なかったため、定着時期はもう少し時代が降ることも考えられる。

また、近代以前の書論を考察した結果、日本で定着している「唐の四大家」「初唐の三大家」の総称は確認できないことから、魚住氏が指摘するように日本において編集されたものであることも裏付けられた。しかし、日本の「唐の四大家」「初唐の三大家」が勝手に割り切られたものであったとしても、裏を返せば日本的な書道史観が反映していると捉えられる。特に顔真卿を含むか否かは日中の書道史観の違いが顕著な例であると思われる。今後は日本において「唐の四大家」観がどのように展開していったのかについても考察していきたい。

注

- (1) 『歴代書法論文選』 七五頁
- (2) 『歴代書法論文選』 四九頁
- (3) 『書法用語辞典』『初唐四家』西東書房、二〇一一年九月、

一三六頁。

- (4) 魚住和晃「欧陽詢は隋唐の大家」(『書道史謎解き三十話』岩波書店、二〇一九年一月、五九頁)。
- (5) 蔡襄『莆陽居士蔡公文集』卷二十五「評書」(北京図書館古籍出版編輯組『北京図書館古籍珍本叢刊』86集部・宋別集類、書目文獻出版社)
- (6) 解縉『春雨雜述』『書學伝授』(『歴代書法論文選』五〇〇頁)なお、『歴代書法論文選』は「本楮河南遂良登善」とあるが諸本により改めた。
- (7) 何紹基『東洲草堂文鈔』『跋汪鑒齋藏虞恭公温公碑旧拓本』
- (8) 震鈞『国朝書人輯略』に「唐四大家」、程瑤田『九勢碎事』に「唐四家」の用例が確認できる。
- (9) 張懷瓘『書斷』中、「妙品」(『歴代書法論文選』一九一頁)
- (10) 前注(9)書、『歴代書法論文選』一九二頁
- (11) 『易』『繫辭伝下』に「君子藏器於身、待時而動」とある。
- (12) 前注(9)書、『歴代書法論文選』一九二頁
- (13) 前注(9)書、『歴代書法論文選』一九二―一九三頁
- (14) 前注(9)書、『歴代書法論文選』二〇三頁
- (15) 張懷瓘『文字論』(『歴代書法論文選』二〇九頁)
- (16) 唐・釈垂栖『論書』に「凡書通即變。欧變右軍体、柳變

歐陽休、永禪師、褚遂良、顏真卿、李邕、虞世南等、并得書中法、後皆自變其體、以伝後世、俱得垂名。」とある。書體を變じて後世に伝えることで名聲を得られる。前人の遺風を継ぐだけでなく、そこに新たな表現を加えることが後世に名を残す条件である。

(17) 徐浩『論書』（『歷代書法論文選』二七五頁―二七六頁）

(18) 前注(17)書、『歷代書法論文選』二七六頁）

(19) 『漢溪書法通解』卷八「書譜」

(20) 張懷瓘『書斷』中、「阮研」の条にも「時称蕭陶等各得右軍一体、而此公筋力最優。」とある。

(21) 何良俊『四友齋書論』（『明清書論集』一三一頁）

(22) 楊賓『大瓢偶筆』卷八「偶筆識余」（『歷代書法論文選』編）五八一頁）

(23) 米芾『宝晋英光集』「跋顏書」（『宝晋英光集』一五二頁）

(24) 楊慎『墨池瑣錄』卷二（『書学集成』元―明三四八頁）

(25) 『東坡題跋』「書唐氏六家書後」（『中国書論大系』第四卷一三一頁）

(26) 『山谷論書』「題顏魯公帖」（『中国書論大系』第四卷二五一頁―二五二頁）

(27) 『画禪室隨筆』「題爭坐位帖後」（『中国書論大系』第一〇卷一〇四頁）